樟葉宮伝承地

さらに継体を支持する尾張などの地方豪族連合軍が得意の水運を利用して、一気に畿内に進出し、ヤマトに圧力をかけ、王権の簒奪に動いたとも見てとれます。このあたりは歴史の永遠の謎です。

交野天神社は、桓武天皇が長岡京へ遷都したときに神事を行った場所としても知られています。

◆第2の宮　筒城（つつき）◆

511年10月、継体天皇は筒城宮（つつきのみや）、現在の京都府京田辺市多々羅附近に遷宮します。早速その宮跡に行ってみましょう。

正確な場所はわかっていませんが、多々羅地区には「都谷」という地名があり、ここを「筒城宮」の推定地とする説もあります。この附近は現在は同志社大学のキャンパス設置のため、大々的に造成されかつての丘陵の姿は変貌を遂げています。

同志社大学田辺キャンパス、正門近くの丘に石碑「筒城宮址」があります。移転の理由はもちろんわかっていませんが、樟葉から筒城へ遷ったということは、ヤマトへ一歩接近したことになるわけで、その意図と無関係に旧ヤマト勢力には強烈な圧力になったと見ることもできます。丘には説明板も用意されています。

筒城宮址伝承地（同志社大学内）

ただ遷宮した本当の理由はもっと別のところにあったのかも知れません。当時朝鮮半島は動乱の様相にあり、軍事力の強化は倭国にとって最大の課題となっていたと考えることができます。

筒城宮が置かれた多々羅という地名は鉄を意味しており、この附近が鉄の産地又は鉄の精製に関わりがあったことが推測されます。またこの地域は木津川に面し、その水利権を押さえ、かつ軍事面でも継体天皇にとって欠かせない要地であったのかもしれません。

なお筒城宮址は同志社大学の門で申し出れば誰でも見学可能です。JR学研都市線では同志社前駅、近鉄京都線では興戸駅で下車です。車で訪問された場合は、申し出れば構内の駐車場に停めさせてくれます。

◆第3の宮　弟国（おとくに）◆

518年、継体天皇は筒城宮から弟国宮（くにのみや）へ遷宮します。3番目の宮になります。宮跡の推定地は、現在の京都府長岡京市今里付近と考えられています。具体的には乙訓寺（おとくに）やそれに隣接した長岡第三小学校付近とされています。

乙訓は、長岡・向日・大山崎地域を指す地名で、古くは「弟国」と記されていました。弟国の地名は、葛野郡（かどの）から分離して新しく郡を作るとき、葛野を「兄国」とし、新しい郡を「弟国」としたことに由来します。

乙訓寺周辺地域からは、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が広範囲に発見されていますが、弟国宮に繋がる遺構の発見はなく、その正確な場所はわかっていません。これまでと違い石碑も説明板も全くありません。ボタンの花でも有名な乙訓寺ですが、この寺は、推古天皇勅願による、聖徳太子の伽藍建立が始まりとされています。また、長岡京から平安京へ遷都する原因といわれている桓武天皇の皇太子早良親王が幽閉された寺として知られています。

弟国宮跡伝承地にある長岡第三小学校

阪急電鉄京都線の長岡天神駅で下車し、徒歩15分ほどの距離です。車で行かれた場合は乙訓寺の駐車場に停めて、小学校も含め附近一帯を散策するといいでしょう。

ところで、筒城宮でヤマトに近づいた継体天皇が、弟国というヤマトから遠い地点に宮を移したということは、依然としてヤマトには継体天皇に敵対する勢力が存在したためとの推測も可能ですが、地図でみると弟国はもう一つの水系、桂川を押さえる場所にあり、淀川（樟葉）、木津川（筒城）、桂川（弟国）と計画的に水運を支配していったことがわかります。継体天皇からすれば予定したとおりの拠点づくりだった可能性が高いと考えられますが、いかがでしょうか。

◆ヤマトの宮　磐余（いわれ）◆

三大水系を完全に押さえた天皇は、いよいよヤマトに宮を築くことになります。これが磐余玉穂宮（いわれのたまほのみや）です。即位から実に20年目、526年のことでした。

磐余は飛鳥に隣接する奈良県桜井市の南部地域のことをいいます。磐余玉穂宮の所在地は、その桜井市池之内付近とされています。

磐余は、神功皇后と履中天皇が都を置いた磐余稚桜宮（いわれわかさくらのみや）が置かれたところでもあり、継体天皇にとって、この地こそヤマトでの宮にふさわしい場所であったのかもしれません。ただいずれの宮跡も特定はされていませんが、伝承は残っています。磐余稚桜宮は稚桜神社に、磐余玉穂宮はそこから西南に300m離れた地点に、地元の人達が「おやしき」と呼ぶ小高い丘があり、これが継体天皇の宮跡とされているわけです。もちろん伝承の域を出ず、考古学的に根拠づけられているわけではありません。

磐余玉穂宮伝承地（池ノ内）

磐余の稚桜神社

早速稚桜神社に行ってみましょう。明日香村に通じる県道15号線を農業大学校を目印に南に向かうルートがわかりやすいでしょう。樹木が台風で倒れ、丘の上の社殿が遠くからでもよく見えますので、迷うことは在りません。参道は丘の西側にあり、白木の鳥居の脇に「式内稚桜神社」と刻んだ大きな石柱が立っています。「稚桜」の由緒は、この地が履中天皇の磐余稚桜宮で、その東に池（磐余池）があったからという趣旨の説明板があります。丘の上からの見晴らしも良く、そこから西南方向を眺めていると自然に継体天皇が思い浮かんできます。

しかし、遷宮の翌年筑紫国造の磐井（いわい）が反乱を起こします。天皇は鎮圧のために大連の物部麁鹿火（もののべのあらかい）を派遣してこれを平定するも、遷宮から5年後この地で崩御します。波乱に満ちた治世でありました。

◆継体天皇御陵◆

今度は継体天皇の御陵を訪ねてみましょう。崩御後、三島藍野陵（みしまのあいののみささぎ）に葬られたとされており、宮内庁は同陵を大阪府茨木市太田三丁目の太田茶臼山古墳に比定していますが、現在では高槻市郡家新町の今城塚古墳から兵馬俑の如き埴輪群が発見されたこともあり、こちらを真の継体天皇陵とするのが定説になっています。

先ずは太田茶臼山古墳に行ってみます。天皇陵らしく宮内庁によって丁寧に管理されており、隣接する地区の公民館には出土した埴輪などの解説板も設置されています。越前出身の天皇陵として地元では大切にされていることがわかります。ただ、この発掘された埴輪の年代からいってもここが継体天皇陵である可能性は低いと思われます。

太田茶臼山古墳

次に、おおかたの学者が真の継体陵とする今城塚古墳に行ってみましょう。天皇陵としては、宮内庁の指定がないため唯一自由に立ち入りのできる場所でした。残念なことに、現在は古墳整備のために周辺すべてをフェンスで覆って立ち入り禁止になっており、中に入ることはできませんが、高槻市の整備に向けた力の入れようは、継体天皇ゆかりの福井県人としては嬉しい限りです。市は近くに発見されたハニワ製造工場も史跡公園として一部復元しています。工場が造られたのは継体期よ